

# イリヤポラの寺院遺跡

(IRIYA POLA)

## 【調査日】

2016年8月19日および8月21日

## 【スタッフ】

△山本、木村尚人、赤堀、武田、吾郷、古結、T.M.C.Bandara（考古局）、Chinthaka Wijetunga（考古局）、レンジャー1名ほか村人傭員4人（8月19日）。

△岡村、大和田、木村亮太、八代、沓澤、山本、三坂、石野、村松、橋富、吾郷、中森、武田、古結、レンジャー1名ほか村人傭員3人（8月21日）

## 【位置】

イリヤポラ遺跡は、ボロンナルワ県ブッタラ近郊のオッカカンピィティヤ村から南東へ約25kmの密林中にある。クンブukkan川（Kumbukkan Oya）に右岸支流のゴーナマラ川（Gonamala Ara）が合流する地点のやや上流北側（左岸側）に孤立する低平な岩丘上と、その南に隣接する樹林内に位置し、河岸の最も近い地点から岩丘までは北東に約450m離れている。スリランカ政府発行の「5万分の1」地図には、岩丘も遺跡印も記されていないが、グーグルアース（Google Earth）では、北東から南西に細長い形のこの露岩が明瞭に認識でき、遺跡の核心部である仏塔跡の地点で、北緯6度36分44秒（6°36'44"N）、東経81度29分37秒（81°29'37"E）という位置データが確認できる。なお同データでは岩丘周辺の密林の標高は約64m（河岸部は60m）と測定されている。

## 【アプローチ】

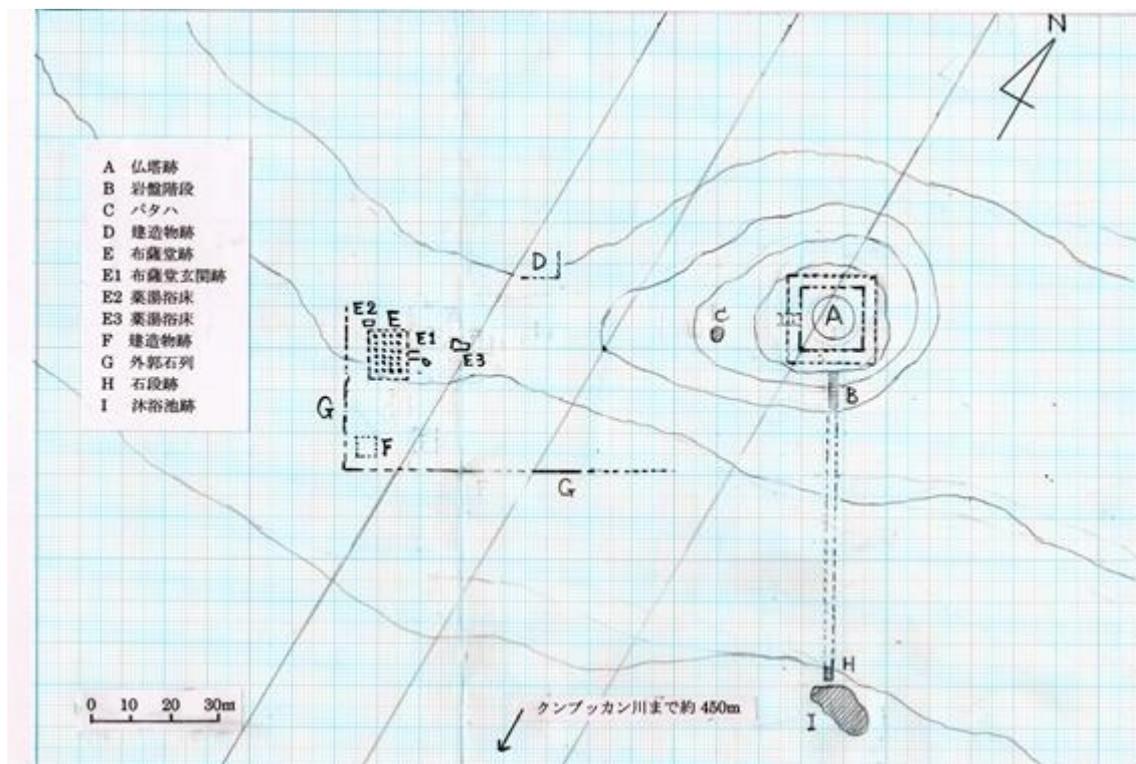
クンブukkan川左岸に置いたベースキャンプから遺跡までは直線でわずか4km足らずだが、「5万分の1地図」に記されているジープ道は内戦期間中に荒廃して廃道となっており、河岸も歩きにくいいため、密林内をほぼ南西へ、ジープ道の痕跡や獣道を辿ってアプローチしなければならない。そのため最初の8月19日には、村人ガイドが遺跡地点のおおよその見当をつけて、北側へ大きく回り込む形で岩丘の北西側から遺跡に到達したが、2回目調査の8月21日には前回の帰路に用いた南側からの近道でアプローチすることができた。岩丘上の仏塔跡から約70m南東へ離れた密林中の池（沐浴場跡）を経由する後者のルートだと、徒歩約1時間の行程であった。

### 【遺跡の全体的状況】

北東から南西へ細長く伸びている低い岩丘の上と、南に隣接する樹林の平地に、伽藍遺構が分布する仏教寺院遺跡である。岩丘上には、二重の正方形基壇を持つ仏塔跡(stupa)と、石柱群を備えた布薩堂跡(uposathagara, chapter house)、岩穴貯水池のパタハ(pataha)などが明瞭に残り、岩丘の南東側の密林中にも沐浴場跡の池(pokuna)や建造物跡の石列などが残されている。

岩丘の規模は長さ 150m、幅 20~30mほどで、北東側の最高部は南側密林の地表から約 20mの高さがあり、その頂上に仏塔跡が位置する。その南西側の岩盤斜面の中腹にパタハがあり、さらに南西側を下った平らな露岩の末端部に、仏塔跡から約 90m離れて石柱が林立する布薩堂跡がある。布薩堂近くの岩盤上には2ヶ所、薬草湯の岩盤浴用と思われる浅い彫り込み床や、建造物跡の石列も残り、岩丘の南側の密林中には寺院外郭を成したと思われる石列も延びている。

また密林中の沐浴場跡は、仏塔の北東側急斜面の岩盤に彫り込まれた階段の延長線上に約 70m離れて位置し、これらから総合するに、岩丘と南側地面を併せた寺院区域は、約 100m四方程度であったと想定される。



### 【部分的状況】

【仏塔跡 A】 岩丘北東端近くの頂上に石壇で二重の基壇を築いて造られた仏塔跡で、基壇は東西南北の方位軸から 30 度ほど左（反時計回り方向）に回転した方位軸に沿って造られている。

二重の基壇のうち、下部の基壇は、狭い頂上部を広げるために岩盤斜面から石垣を積み上げて造った四方の擁壁によって成り、南東側と南西側の辺は崩落して土砂混じりの斜面となっているものの、北東側と北西側は角を含めた石垣が1～3段ほど残っていることから、一辺が21mの正方形基壇であったことが分かる。

また、その上に造られた上部基壇も、南東側と南西側は崩壊が激しいが、北東側と北西側は、東と北と西の角とともに石積みが2～6段ほど明瞭に残っていることから、一辺が15m規模の正方形であったことが計測できる。さらに、土砂に埋もれずに全体が露呈している東角の石積みからは、上部基壇を支えるための高さ3mほどの石垣があったことが見て取れる《註※》。なお、これらの石垣に用いられているのは、いずれも大小の立方体の切石か、積める程度に成形を施した自然石であり、一辺が50cm前後の石材が多く見られた。



この二重基壇の上に、完全に崩壊した伏鉢の跡が土砂や煉瓦片の小山となって残っており、頂上部に開けられた盗掘跡の穴からは円状に組まれた煉瓦積みの跡がうかがえる。その伏鉢は、一辺が15m四方の上部基壇に建っていたことから、基部直径は10～12mほどであったろうと推定できるが、内部の芯柱(yupa stone)や傘蓋などの上部構造物

は岩丘斜面や麓の密林部でも発見できなかった。また伏鉢に用いられた煉瓦には、 $32 \times 27 \times 8\text{cm}$  のもの、 $28 \times 22 \times 7\text{cm}$  のもの、 $22 \times 8 \times 8\text{cm}$  のものなどがあり、周辺にはわずかながら伏鉢表面の装飾用に角を丸めた煉瓦や、同心円（メダリオン）文様が刻まれた煉瓦片なども散乱している。

さらに、この仏塔の南東側の急斜面岩盤には、基壇下から麓の密林地帯まで階段（B）が刻まれ、その延長線上には沐浴場跡（I）も位置するが、仏塔基壇への上がり口はこの南東辺側には見られない。一方、岩盤傾斜の緩い南西側には、土砂の崩壊で不明瞭ながら上下基壇の石列の間に階段跡らしき石列が見られることや、布薩堂（E）などの他の伽藍施設もその方向にあるところから、こちらに上がり口（玄関）の階段があっただろうと推定できる。ただし、玄関付属物の守護石（guard stone）や半月形踏石（moon stone）、手摺りなどの痕跡は周囲のどこからも発見できなかった。

《註※》上部基壇東角に見える高さ 3m の石垣が、そのまま下部基壇から上部基壇までの高さを表すものかどうかは定かではない。高すぎるという疑念とともに、急斜面上の二重基壇を強化するため、上部基壇の擁壁も岩盤から直接石を積み上げ、途中までを土で埋めて下部基壇の表面とした可能性も考えられるからである。

**[彫り込み階段 B]** 仏塔基壇の南東辺中央部の下から、直角の方向に降りる形で岩盤急斜面上に刻まれている階段で、途中の一部は岩盤剥離や摩耗によって消失しているが、20 段の彫り込みが、幅 115cm、蹴込み 34~41cm、蹴上げ 5~8cm の姿で、長さ（斜面延長）約 11m にわたって麓の地面に接するところまで残っている。なお、この階段の正確な延長線上（南南東方向）に沐浴場跡の池があるため、階段は沐浴場への歩道とつながっていたものと考えられる。



[パタハ C] 仏塔の南西側斜面の中腹にある岩穴貯水池で、天然の岩の窪みに手を加えて、雨水を貯める貯水池としたものである。円形に近い楕円形の挿鉢型を成し、貯水可能な上縁部は長径 370cm、短径 270cm ほどで、最深部の深さは 100cm ほど。調査時には乾期にも関わらず全体容積の半分近くまで水が貯まっていた。



[建造物跡 D] 仏塔跡がある岩丘頂上部から西へ斜面を下れば、低平な露岩が広がり、その北側は露岩と同じ高さの地面となって、密林が全体を覆っている。その露岩と地面の境目の地面側に、天然の岩と繋いだ鉤型の石の並びが認められるため、何らかの建造物跡ではないかと疑われるが、定かではない。露岩の北側は下生えの藪がはびこる密林のため、今回は入り込んでの調査はできなかった。

[布薩堂跡 E とその周囲] 布薩堂跡は、仏塔跡と並んで、この遺跡区域で最も明瞭な形が残っている遺構である。仏塔からは西南西に約 90m 離れて建ち、仏塔と同様、東西南北の方位軸から 30 度左回りにずれた方位軸に従って造られている。建物の基壇や外郭は崩壊し、堆積土に埋もれているため測定は不可能だが、周囲からの土の盛り上がりや、北東側にある玄関跡、内部に立ち並ぶ石柱の分布範囲などから、11m × 8 m ほどの規模の長方形基壇があったことが見て取れる。

その基壇上の石柱は、もともとは北西から南東への長辺に沿って 6 本ずつ、北東から南西への短辺に沿って 4 本ずつの合計 24 本が、ほぼ等間隔で立ち並んでいたようで、そのうち 6 本が立ったまま（一部は傾きながらも）残り、4 本が地表に倒れたり根本から折れた姿で残っている。これらの石柱は、高床式の木造建物である布薩堂の床の梁を支えていたもので、凹凸のある現在の地表からの高さは 190cm から 292cm とまちまちだが、本来の長さは 3 m を超え、上端は上部階の床を水平に支えるように揃えられていたものと思われる。また柱の石材は、太さも成形の度合いもまちまちの角柱であり、断



面が  $24 \times 56\text{cm}$  の石板型のものから  $18 \times 35\text{cm}$  の比較的細いものまで多様にあるが、それぞれの柱の中心から隣の柱の中心までは  $150\text{cm}$  ほどの間隔で統一されて立てられていたことが、残存する柱の位置から推定できる。そのことから、この石柱群は、 $8\text{m} \times 5\text{m}$  ほどの長方形の敷地内に立ち並び、その規模の建物が  $11\text{m} \times 8\text{m}$  ほどの基壇上に建てられていたことが明らかである。

〈布薩堂玄関 E1〉 布薩堂基壇の北東側（仏塔の方向）に造られた正面玄関の遺構だが、激しい盗掘のために、幻獣マカラの浮き彫り文様が施された階段手摺りが左右2つとも位置をずらされ、半月形踏石（ムーストーン）も引き剥がされて裏返しにされており、表側の文様などの詳細は不明となっている。

また、左右両側の手摺りの間を掘り返した土が周囲に堆積し、階段に使われた石材などを覆っているため、正確な階段幅や石段の段数などは知ることができない。しかし、裏返しにされたムーストーンの直径（階段に接する直線部）が  $140\text{cm}$  であることから、階段幅はそれよりやや広い程度だったことが推測できる。



さらに、マカラ像が浮き彫りされた手摺りは、2つとも半ば土に埋もれているものの、厚さ 20cm の石材で、入口手前部分（マカラの巻舌文様部分）の高さが 86cm、全体の長さが 246cm であることが実測できた。ムーンストーンも 140cm の直径に対して半月形の奥行き（半径）が 92cm であり、正確な半月形ではないことが確認できた。なお、通例なら建物玄関に階段手摺りやムーンストーンとともに付設されるはずのガードストーン（守護石）は、周辺からも発見されなかった。

〈岩盤浴床 E2〉布薩堂基壇の北西辺、西角近くの岩盤に、長方形の浅いプールのように彫り込まれた遺構がある。東西 84cm、南北 160cm、深さ 10cm ほどの彫り込みで、用途などは不明だが、大きさや形状から見ると、薬草の湯などを張って人が寝て身を浸す装置とも考えられるが、雨期には満水になることは確かであるから、取水や沐浴用など、他の用途も考えられる。

〈岩盤浴床 E3〉布薩堂玄関（E1）から北東に約 10m 離れた岩盤上にも、東西 2m×南北 1m、深さ 10cm ほどのいびつな方形（岩盤剥離で正確な形は失われている）の彫り込みがあり、E2 と類似した浅いプール状の遺構となっている。そのプールの北辺につながる形で岩盤の東西に幅 2cm、深さ 2cm ほどの溝も彫られており、緩やかな傾斜を利用してプールに水を流し、排水したことが想定できる。こちらも用途は不明だが、比丘たちがこのプールに横たわって薬湯治療などをしたものであろうか。



〔建造物跡 F〕布薩堂の裏側に当たる南西辺から 5m ほど離れて、布薩堂の背後を建物と平行に走る形で一段のみの石列（G）がある。石列は露岩上から密林の中まで南東方向に直線続き、途中から直角に曲がって密林内を北東方向に続いているが、その曲がり角の内側に、ほぼ土中に埋もれながらも上面だけが見える方形の石列があり、何らかの建造物跡を示している。一辺が 5m ほどの正方形の囲みを成し、一辺 40～60cm ほど

の立方体の切石が用いられているが、詳細は不明である。

**〔外郭石列 G〕** 前述のように、布薩堂の背後を 5m ほど離れて露岩上から密林内まで直線で南東へ続き、途中から直角に曲がって、やはり直線で密林内を北東に延びている石列である。岩盤上での起点は不明だが、布薩堂の西角よりやや北西の地点から、一段のみの石列として南東に延びており、密林内では石全体が土に埋もれて上面しか見えない形で、一部途絶えながらも 30m ほど続いて直角に北東方向へ曲がり、やはり途中が土に隠されながらも 50m ほど続いたあたりで見えなくなっている。石列の延長方向は仏塔や布薩堂と同じ方位軸に沿っており、このことから寺院境内を区切る外郭部であったとも考えられる。使われている石材は一辺が 40~60cm ほどの立方体の切石である。

**〔石段跡 H〕** 仏塔の下の南東斜面岩盤に刻まれた階段 (B) の正確な延長線上 (南東方向) にある石段の跡で、沐浴場の池に降りる道の一部を成している。仏塔下の岩盤階段からここまでの密林中の道は消失しているが、この階段の向きからしても約 60m の直線歩道があったものと推定できる。階段は崩壊して土砂に埋もれているため、方形に成形された切石が一部見えるのみで、段数なども不明である。

**〔沐浴場跡 I〕** 仏塔から約 70m 南東に離れた密林中にある池で、上記の石段 (H) 以外に護岸施設の痕跡は見えないが、自然地形に手を加えて貯水池としたものである。広さは正確に測定できないが、樹木のない池の窪みの範囲は 10m×20m ほどの楕円形を成し、乾期の我々の調査時にも 3m×5m ほどの楕円形の範囲に浅く水が貯まっていた。寺院からクンプukkan川までは最短距離でも 450m の距離があるため、近くのこの場所に池を造って沐浴場としたものであろう。



**〔付記〕** 本遺跡の調査は前後 2 日間に及んだが、初回調査には考古局バンダーラ氏とチンタカ氏が同行して発見遺構の説明などがあったにも関わらず、日本側隊員が遺跡およ

び仏教知識のない調査初心者のみであったため、十全に理解できず、測量も計測の必要箇所などが分からないまま成されたため、調査はきわめて不完全であった。また2回目も、同行した岡村が隊員への遺跡のレクチャーに大半の時間をとられて補完測量に加われず、岩盤浴床（E1）など見落としした部分もあって、調査はまったく不完全であったことを述べておかねばならない。従って本データは、測量結果の確かなものに、全隊員からの聞き取りや、写真、スケッチなどの分析結果を加え、討論結果を総合して作成したものとなっている。また不明建造物跡（D）のある岩丘北側の密林と、布薩堂跡以西も露岩が続く西側部分は未探検であり、遺構はさらに広く分布する可能性があることも付記しておきたい。